

日本の作家等とジョージ・エリオット (書誌)

Japanese Writers and George Eliot: A Bibliography

大 嶋 浩*
OSHIMA Hiroshi

This is a bibliography of noted literary persons and thinkers in Japan whose writings and translations contain references to George Eliot. The entries are divided according to Japanese writers and are presented in chronological order. The first half of the bibliography appear in the present issue, and the rest will be added in the next issue.

This is not a complete bibliography of Japanese writers and George Eliot. I apologize for any inadvertent omissions and hope that further research will provide a comprehensive bibliography.

キーワード：書誌, 日本の作家, ジョージ・エリオット

Key words : bibliography, Japanese writers, George Eliot

I はじめに

本書誌は、ジョージ・エリオットへの言及を含む、日本の著名な作家や思想家等の著作物（翻訳も含む）を調査したものであり、現在調査中の日本におけるジョージ・エリオット文献書誌¹の副産物として作成されたものである。日本におけるジョージ・エリオットの受容の一端がこの書誌からも窺えるであろう。

これまでの調査において、日本におけるエリオットへの言及が見出せる一番古い文献は、明治16年3月13日付けの『自由新聞』に掲載された、無記名の「稗官の所得」であると考えられていたが²、今回の調査において、更に古い文献の存在が確認された。ス邁爾斯（スマイルズ）著、中村正直譯の『西國立志編：原名 自助論』（須原屋茂兵衛〔ほか〕、明治3-4年；本書誌「中村正直」の項を参照）である。本書誌の最大の収穫であると言ってよいであろう。

本書誌の各項目は作家ごと（生年順）に区分し、年代順に整理している。ただし、連載のものに関しては、初出

を基準として一括して整理し、その細目は破線（---）で区切って明示している。また、数版を重ねている書籍の場合、初版本及び改訂等で内容に変化が認められるものを中心に調査した。同様に、幾つかの出版社から複数出版されている書籍や繰り返し出版されている著名な作家の全集もの場合、できるだけ古い出版年と最新の出版年のものを中心に調査した。

原則としてできるだけ発表当時の表記に準じ、旧字体を用いているが、一部新字体を採用したところもある。

掲載頁数の関係上、本稿では本書誌の前半部を掲載し、後半部は掲載する予定である。

本書誌をより完全なものにするために、情報等をお寄せいただければ幸いである。本書誌を作成するにあたっては、文献資料の調査・収集等において兵庫教育大学附属図書館の学術情報チームには特にお世話になった。ここに記して感謝する。

II 日本の作家等とジョージ・エリオット

発行年月日	著者名・訳者名等	作品名・論文名等	書名・雑誌名等	発行所、頁等	備 考	
中村正直（敬字）（1832-1891）						
1870.11. （新刻）	明治 3	ス邁爾斯（スマイルズ）著、中村正直譯	第一編 第二、三編 第四編 第五編 第六、七編 第八編 第九編 第十編	西國立志編：原名自助論 第一冊 西國立志編：原名自助論 第二冊 西國立志編：原名自助論 第三冊 西國立志編：原名自助論 第四冊 西國立志編：原名自助論 第五冊 西國立志編：原名自助論 第六冊 西國立志編：原名自助論 第七冊 西國立志編：原名自助論 第八冊	須原屋茂兵衛〔ほか〕	初版刊行時期については諸説異同があり、必ずしも明確ではないが、第一冊、第二冊の初版は「明治3年12月から静岡の2書肆〔本屋市藏、須原屋善藏〕で売り捌かれている」と指摘されている（石田德行、『西國立志編』と静岡～出版事情をめぐる一試論～、『駿府・静岡の芸能』第4巻〔静岡大学文学部、2006.03.31〕:10）；本項に記載している発行年月日は「新刻」の日付けである（大久保利謙、「中村敬字の初期洋学思想と『西國立志編』の記述及び刊行について一若干の新史料の紹介とその検討一」、『史苑』第26巻第2・3号〔立教大学文学部史学会、1966.01.28〕:84-85を参照）

*兵庫教育大学（社会・言語教育学系）

1871.07. (新刻)	明治 4		第十一編 第十二編 第十三編	西國立志編：原名自 助論 第九冊 西國立志編：原名自 助論 第十冊 西國立志編：原名自 助論 第十一冊			第十二編のモットーとして、エリオットの『ロモラ』第16章からの一節が引用されている
1981.01.10	昭和 56	サミュエル・スマイルズ著、中村正直訳	第十二編 儀範（また典型という）を論ず	西國立志編	講談社学術文庫、講談社、pp.463-94;エリオットへの言及はp.463.		第十二編のモットーとして、エリオットの『ロモラ』第16章からの一節が引用されている
外山正一 (1848-1900)							
1890.03.23	明治 23		エリオットの小説	江湖新聞	第十一號, 第一面		「外山正一氏はゾルヂ, エリオットの小説を以つて十九世紀に傑出すと爲せり。」
小泉八雲 (Lafcadio Hearn; 1850-1904)							
1927.11.10	昭和 2	Lafcadio Hearn (講述者 小泉八雲, 校訂者 田部隆次, 落合貞三郎)	"Victorian Fiction" の中の "George Eliot"	<i>A History of English Literature in a Series of Lectures</i> , vol. II (『小泉八雲 英文学史 (第二巻)』)	北星堂書店, pp.741-51; 他に pp.665, 858でもエリオットに言及		
1932.02.10	昭和 7	小泉八雲 (落合貞三郎, 大谷正信, 戸澤正保, 田部隆次翻訳; 「十九世紀後半の英國小説」の翻訳は田部隆次)	十九世紀後半の英國小説	『小泉八雲全集第十六巻』學生版	第一書房, pp.539-93; エリオットへの言及は pp.543-51.		エリオットのことをかなり詳しく紹介; 『ロモラ』を称賛: 「とにかくその浪漫的時代の描寫として, この書物は英文學に於いてのみならず, 恐らく世界文學に於て拔群の物であると云ふ事ができると私は考へる。」(p.548)
1934.09.26	昭和 9	Lafcadio Hearn (小泉八雲)	"CHAPTER VI PESSIMISTS AND THEIR KINDRED," "NOTE ON CHRISTINA ROSSETTI AND HER RELATION TO VICTORIAN POETRY"	On Poets (『詩人論』)	北星堂書店, pp.263-89, 707-18; エリオットへの言及はpp.272, 709-10.		
1938.11.03	昭和 13	Lafcadio Hearn (講述者 小泉八雲, 校訂者 田部隆次, 落合貞三郎)	"Victorian Fiction" の中の "George Eliot"	<i>A History of English Literature</i> 『小泉八雲 英文学史』(縮刷普及版)	改訂縮刷版, 北星堂書店, pp.645-53; 他に pp.583, 740でもエリオットに言及		
1949.09.20	昭和 24	ラファディオ・ハーン (町野静雄譯)	十九世紀後半の英國小説	英文學入門	教養叢書, 堀書店, pp.144-99; エリオットへの言及はpp.148-56, 167.		「彼女はスイスで部教し, 大学の課程を, 当時としては可能な範囲までついて行つたのだから, まつたくの大学卒業者と考へられねばならぬ」(p.148), 「ルイス夫人は氣ちがひだつた」(p.149)等の不正確な記述あり; 『ロモラ』を「ジョージ・エリオット全著作中最大の傑作である」(p.153)と評価
1980.12.10	昭和 55	ラファディオ・ハーン (池田雅之, 伊沢 東一, 金沢 豊, 中里 壽明, 立野正裕 訳)	第18章 19世紀のイギリス小説 (後期)	ラファディオ・ハーン 著作集 第六巻 文学の解釈・1	恒文社, pp.303-43; エリオットへの言及は pp.306-12; 他に p.400でもエリオットに言及; 記載は第二版 (1989.01.20) による; 『文学の解釈』(全二巻) は東京帝大で1896年 (明治29年) から1903年まで行つた主要な英文学講義 (44編) を編纂したもの		「スイスで勉学にはげみ, 当時最高の大学教育を修めた」(p.306), 「ルイス夫人は狂気の人」(p.307)等の不正確な記述あり; 「本書は英文学史上, いやひよっとすると世界文学史上にひとり屹立する作品であるといつてもよいかもしいない」(p.309)と『ロモラ』を称賛
1982.12.30	昭和 57	ラファディオ・ハーン (野中涼, 野中恵子訳)	「XI ヴィクトリア時代の小説」の中の「ジョージ・エリオット」	ラファディオ・ハーン 著作集 第十二巻 英文学史 II	恒文社, pp.242-51; 他に pp.174, 341でもエリオットに言及; ハーンは明治29年秋から明治36年3月まで東京大学で毎週英文学史の講義を行つた。この6年半の間にその講義は二まわりした。この『英文学史』はその二回目の講義を聞いた学生のノートブックを本に編集したもの (ラファディオ・ハーン, 『英文学史』, 野中涼・野中恵子訳[恒文社, 1981]の「解説」[p.479]を参照)		「ルイスには気がちがった妻がいて」(p.243)等の不正確な記述あり; 「この小説 [『ロモラ』]こそ彼女の全作品中の最高傑作だと思っている」(p.245), 「散文作家としては, 女性最大の作家, とまでは言えないとしても, 最大の作家の一人に入ることは間違いない」(pp.250-51)

日本の作家等とジョージ・エリオット（書誌）

1987.08.30	昭和62	ラフカディオ・ハーン（佐藤喬，池田雅之，神田庄二，遠田勝，鳥海久義，鳥海美恵子 訳）	『第22章 クリスティーナ・ロセッティとヴィクトリア朝詩との関係についての覚え書』	ラフカディオ・ハーン著作集 第十三巻 詩論・詩人論	恒文社，pp.525-44；エリオットへの言及はp.528, 543n(10)	「ブラウニング夫人よりはるかに偉大な女性，「ジョージ・エリオット」も，非常にきちんとした詩集を一冊書いているが，今では，誰もそれを見ようとはしない。」(p.528)
水谷不倒（1858-1943）						
1896.07.15	明治29	水谷不倒生	シャーロット，プロンテ小傳	文藝俱樂部	第二巻第八編，pp.143-49.	シャーロット・bronテの『ジエーン，エール』の水谷不倒生の翻訳「理想佳人」（pp.142-58）につけられている小傳；エリオットへの言及はp. 147.
尾崎行雄（1858-1954）						
1890.02.20	明治23		文學上の尾崎行雄氏	國民新聞		「英國の文學界にても二十年前まではジョージエリオット女史等が書きたる人情小説大流行にして其模倣者の多き殆ど螢光燈を消すの有様なりければ……エリオット ^マ 流の人情小説の倦まれたる其反動にして今日は斯かるものゝ讀まるる時節となり」
1890.02.27	明治23		文學世界の近況	朝野新聞	第四千九百號，第一面，(社説)	『近代文学評論大系 第1巻 明治期I』（角川書店，1971.10.30）に収録；著者は「尾崎[行雄]か，それに近い人と推定」されている（同書，「解題」，p.486）
1971.10.30	昭和46		文學世界の近況	吉田精一，浅井 清編『近代文学評論大系 第1巻 明治期 I』	角川書店，pp.98-99；エリオットへの言及はp.99.	著者は「尾崎[行雄]か，それに近い人と推定」されている（「解題」p.486）
坪内逍遙（1859-1935）						
1885.03.10	明治18	坪内雄蔵	仮作物語の變遷	中央學術雑誌	第壹號，pp.12-16. (論説)	『小説神髓』中の「小説の変遷」とほぼ同じ内容であるが，字句等が多少，初刊本とは異なっている。
1885.03.25			仮作物語の變遷（前號ノ續キ）		第貳號，pp.13-18. (論説)	
1885.05.10			仮作物語の變遷（接第二號）		第五號，pp.5-11. (論説)	
1885.08.04	明治18	春のや隠居おぼろ	小説を論じて書生形氣の主意に及ぶ	自由燈	第三百貳拾九號（寄書）；ページ付けなし	「春のや隠居おぼろ」とは坪内逍遙のこと；『近代文学評論大系 第1巻 明治期I』（角川書店，1971.10.30）に収録；「……近代の小説家は概ね人情を主體として其脚色と趣向を設けて専ら美術的精神にて小説を編む事とはなりぬ英のエリオット女史をはじめ米のプレット，ハート氏の如きも重に此主意のやうに思はる」
1885.08.05			小説を論じて書生形氣の主意に及ぶ（續キ）		第三百三拾號（寄書）；ページ付けなし	
1885.08.14	明治18	春の舎おぼろ	小説論一斑一小説の主眼	自由燈	第三百三拾八號（寄書）；ページ付けなし	「春の舎おぼろ」とは坪内逍遙のこと；『小説神髓』中の「小説の主眼」と同一内容；ただし，末尾の本居宣長「玉の小櫛」の引用部分は省略されている
1885.08.16			小説論一斑（小説の主眼續キ）		第三百四拾號（寄書）；ページ付けなし	
1885.08.19			小説論一斑（小説の主眼續キ）		第三百四拾貳號，（寄書）；ページ付けなし	
1885.08.21			小説論一斑（小説の主眼續キ）		第三百四拾四號，（寄書）；ページ付けなし	
1885.08.22			小説論一斑（小説の主眼續キ）		第三百四拾五號，（寄書）；ページ付けなし	
1885.08.25			小説論一斑（小説の主眼續キ）		第三百四拾七號，（寄書）；ページ付けなし	
1885.08.26			小説論一斑（小説の主眼續キ）		第三百四拾八號，（寄書）；ページ付けなし	
1885.09.			明治18		坪内雄蔵	
1885.09.		第二冊，松月堂，（小説神髓上巻 十一～二十）				
1885.09.26		第三冊，松月堂，（小説神髓上巻 廿一～三十）				
1886.03.	明治19			第四冊，松月堂，（小説神髓上巻 三十一～四十）		

大 嶋 浩

1886.04.				小説神髓	第五冊, 松月堂, (小説神髓下巻目次, 小説神髓下巻 一〜九)	
1886.04.				小説神髓	第六冊, 松月堂, (小説神髓下巻 十〜十九)	
1886.04.				小説神髓	第七冊, 松月堂, (小説神髓下巻 二十〜二十九)	
1886.04.				小説神髓	第八冊, 松月堂, (小説神髓下巻 三十〜三十九)	エリオットへの言及は (小説神髓下巻 三十七)
1886.04.				小説神髓	第九冊, 松月堂, (小説神髓下巻 四十〜四十八)	
1887.04.23	明治20	坪内逍遙	小説の手段 第一	讀賣新聞	三千六百八十三號	『小説神髓』(岩波文庫, 岩波書店, 1936.10.10) に収録
1887.04.26		逍遙遊人	小説の手段 第二		三千六百八十五號 (マイクロ原本が一部欠けており, 号数を確認できなかった。号数の記載は『小説神髓』(岩波文庫, 岩波書店, 1936.10.10), p.252の情報に基づく。)	
1887.04.28			小説の手段 第三		三千六百八十七號	「式部の源語, 春水の情史, デホー, 李チャードソンの小説, ラースチン, フヒールディングの稗史, サツカレー, デッケンス, スモーレット, リットン (時代物あり), エリオットの類ひ, いづれも現在を寫したりし者なり。」
1890.12.07	明治23	逍遙	新作十二番のうち既發四番合評 總評	讀賣新聞	頁付けなし	『小羊漫漉言』(1893.06.19)に所収の折「小説三派」と改題; 『近代文学評論大系 第1巻 明治期I』(角川書店, 1971.10.30)に収録
1890.12.08			新作十二番のうち既發四番合評 總評 (其二)			
1890.12.09			新作十二番のうち既發四番合評 總評 (其三)			
1890.12.10			新作十二番のうち既發四番合評 總評 (其四)			「ジヨージ, エリオットの諸作は評者の詳しからぬ所なれど嘗て見つる「ミッドル, マーチ ^[17] 」によりて判ずれば頗るドラマの旨に稱へり」
1890.12.11			新作十二番のうち既發四番合評 總評 (其五)			
1890.12.12			新作十二番のうち既發四番合評 總評 (其六)			
1890.12.13			新作十二番のうち既發四番合評 總評 (其七)			
1890.12.14			新作十二番のうち既發四番合評 總評 (其八)			
1890.12.15			新作十二番のうち既發四番合評 總評 (其九)			
1892.10.30	明治25	メレー, カツチング (坪内雄蔵譯)	小説に於ける二勢力	早稲田文學	第貳拾六號, pp.1-9. (時文評論)	「フォーラム」掲載の「メレー, カツチング」の所論の「抄譯」(p.1); <i>Romola, Middlemarch</i> に言及 (pp.5, 6); 柳田泉『西洋文学の移入』(p.252)によれば, 執筆は坪内逍遙
1892.11.15	明治25	(坪内逍遙)	「ジェームス, サリーの小説論」, 「美術の特質」, 「美術の進化」, 「近代小説の特質」, 「寫實と理想と」, 「小説の未來」, 「其の評」	早稲田文學	第貳拾七號, pp.1-15. (時文評論)	「現代心理學名家の一人ジェームス, サリー氏が嘗て『フォーラム』に掲載せし「小説の未來」といふ論文」(p.1)の紹介; 目次の表記では「ジェームス, サリーの小説論」; 「ジェームス, サリーの小説論」(pp.1-2), 「美術の特質」(pp.2-3), 「美術の進化」(pp.3-4), 「近代小説の特質」(pp.4-6), 「寫實と理想と」(pp.6-10), 「小説の未來」(pp.10-13), 「其の評」(pp.13-15); エリオットへの言及はp.6; 柳田泉『西洋文学の移入』(p.252)によれば, 執筆は坪内逍遙

日本の作家等とジョージ・エリオット（書誌）

1893.01.30	明治 26	坪内逍遙	美辭論稿 第三 語の源 第四 文の形	早稻田文學	第三拾貳號, pp.13-29.	
1893.02.10			美辭論稿 第五 文の三大門 第六 智の文—(其一) 品類		第三拾三號, pp.31-56.	
1893.02.25			美辭論稿 第七 智の文 (第二) 理想		第三拾四號, pp.57-81.	
1893.03.10			美辭論稿 第七 智の文—(第二) 理想 つゞき		第三拾五號, pp.83-107.	エリオットへの言及はp.98.
1893.03.25			美辭論稿 第八 情の文—(第一) 情緒		第三拾六號, pp.109-16.	
1893.04.10			美辭論稿 第九 情の文—(第二) 本義		第三拾七號, pp.117-30.	
1893.04.25			美辭論稿 第十 情の文—(第三) 詩歌		第三拾八號, pp.131-38.	目次の表記は「美辭論稿— 第十, 情の文—(第三, 品類)」
1893.05.10			美辭論稿 第十一 情の文 (第四) 詩歌の三 體 (甲) 主觀の詩歌, (乙) 客觀の詩歌, (丙) 主觀兼客觀の詩歌		第三拾九號, pp.139-50	
1893.05.25			美辭論稿 第十二 情の文—(第五) 華文		第四拾號, pp.151-55.	
1893.06.10			美辭論稿 第十二 情の文—(第五) 華文 つゞき		第四拾壹號, pp.157-62.	
1893.09.25			美辭論稿 第十三 情の文—(第六) 理想		第四拾八號, pp.163-80.	
1893.06.19	明治 26	坪内雄藏	小説三派	小羊滂言	有斐閣書房, pp.71-85 ; エリオットへの言及は p.83.	初出は『讀賣新聞』附録 (1890.12.07-1890.12.15) ; 初出のタイトルは「新作十二番のうち既發四番合評」
1895.05.20	明治 28	坪内逍遙	國文學の將來 (演説の体に倣ふ)	國學院雜誌	第七, pp.1-11. (論説)	
1895.06.20			國文學の將來 (演説の体に倣ふ, 承前)		第八, pp.1-16. (論説)	
1895.07.20			國文學の將來 (演説の体に倣ふ, 承前)		第九, pp.1-12. (論説)	エリオットへの言及はp. 10.
1901.06.02	明治 34	坪内雄藏		英文學史	東京専門學校出版部, pp.798-806, 893, 894-95, 903.	「本書はもと東京専門學校文學科講義録の為に起稿せしものなるを、數々改補して再三講義録に掲げ、こたび又修正して此一巻とはなせるなり。……引用、参考の書類のうちにて、負ふところ、尤も多きは、ブルック、ダウデン、ゴッス、セインツベリ、テーム等の諸家也。就中、近代に關する分は、主としてセインツベリ氏の『十九世紀英國文學史』に據り、傍ら諸家の見を參酌せり。」(「緒言」 pp.1-2)
1902.02.10	明治 35	坪内雄藏		英文學史 (再版)	東京専門學校出版部, pp.804-12, 899, 900-901, 909.	エリオットに関する記述は初版と同一内容
1936.10.10	昭和 11	坪内逍遙	小説神髓	小説神髓	岩波書店, 岩波文庫, pp.15-183.	エリオットへの言及はpp. 53, 66-68, 162.
1936.10.10	昭和 11	坪内逍遙	小説の手段 第三	小説神髓	岩波書店, 岩波文庫, pp. 252-55.	エリオットへの言及はp. 253.
1971.10.30	昭和 46	春のや隠居おぼろ/逍遙	「小説を論じて書生形氣の主意に及ぶ」, 「新作十二番のうち既發四番合評」	吉田精一, 浅井 清編 『近代文学評論大系 第1巻 明治期 I』	角川書店, pp.27-29, 152-67 ; エリオットへの言及はpp.27, 157.	
2003.12.16	平成 15	坪内逍遙	小説神髓 (抄)	千葉俊二, 坪内祐三編 『日本近代文学評論選 【明治・大正篇】』	岩波書店, 岩波文庫, pp.7-20.	エリオットへの言及はpp.15-17 ; ジョン・モーレイのエリオット評に言及
高田半峯 (1860-1938)						
1886.01.01	明治 19	半峯居士	當世書生氣質の批評 (其一, 其二)	中央學術雜誌	第二十一號, pp.28-40. (批評)	半峯居士とは高田半峯のこと ; 『近代文学評論大系 第1巻 明治期I』(角川書店, 1971.10.30) に収録 ; 『明治藝術・文學論集』(筑摩書房, 1975.02.28), pp.126-32に収録 ; エリオットへの言及はp.38.

1886.02.10			當世書生氣質の批評 (其三[上])		第二十二號, pp.24-28. (批評)	
1886.02.25			當世書生氣質の批評 (其三[下], 其四)		第二十三號, pp.27-34. (批評)	
1971.10.30	昭和 46	半峯居士	當世書生氣質の批評	吉田精一, 浅井 清編 『近代文学評論大系 第1巻 明治期 I』	角川書店, pp.327-38 ; エリオットへの言及はp. 332.	
1975.02.28	昭和 50	高田半峯	當世書生氣質の批評	明治文学全集 79: 明 治藝術・文学論集	筑摩書房, pp.126-32; エ リオットへの言及はp. 129.	
内村鑑三 (1861-1930)						
1897.06.27	明治 30	(内村鑑三)	Literature of the Victorian. I.		第千三百七十九號, p.2. (英文欄; English Department—No.444)	『内村鑑三全集 4』(岩波書店, 1981.06.24) の「解題」(亀井俊介)によれば, 「Richard le Gallienneの記事に従って, ヴィクトリア朝の イギリス文学の展開を紹介した。大部分 が引用からなるほか, 内容的にも文体的にも 内村鑑三を思わせる要素は少ない。旧全集 には収録されている。」(pp.458-59)とある; 記 載は復刻版(『萬朝報 19』(日本図書センター, 1985.01.25))に基づく
1897.06.29			Literature of the Victorian. II.		第千三百八十號, p.2. (英文欄; English Department—No.445)	"In 1858 came 'George Eliot' with 'Scenes from Clerical Life' [sic] ...; 1859 was another great year, 'Adam Bede,'"
1897.06.30			Literature of the Victorian. III.		第千三百八十一號, p.2. (英文欄; English Department—No.446)	
1897.07.25	明治 30	内村鑑三纂譯	志望 (卷末の原詩 「A WISH」)	愛吟	警醒社, p.75, 原詩p.25.	第三版 (1898.06.25) の記載に基づく; "O May I Join the Choir Invisible"の最後の数 行を「精神訳」(「自序」, p.1)したもので; 「目次」では「志望 マリヤン, エバンス 婦」, 本文では「志望 マリヤン エバ ンス婦「ジョージ, エリオット」, 原詩では "George Elliot"と誤記; 『内村鑑三信仰著 作全集 5』(1962.07.12), 『内村鑑三全集 4』(1981.06.24)に収録
1915.09.14	大正 4			愛吟 (改版)	警醒社, p.75, 原詩p.25.	第16版 (1920.08.05, 版の番号は初版から の通し番号となっている)の記載に基づく; 「自序」の前に「改版に際し此小著を左の 人々に献ず」という内容が追加されている; 本文では表記法等の変更がなされている
1899.02.15	明治 32	内村鑑三	英語の美	東京獨立雑誌	第貳拾貳號, pp.2-7.	エリオットへの言及はp.7: 「小説を愛する 者にはヂッケンスとサツカレーと, ジョー ジ エリオットとマクドナルドあり」; 『外 国語之研究』(東京獨立雑誌社, 1899.05.07)に収録
1899.05.07	明治 32	内村鑑三	英語の美	外国語之研究	發行所 東京獨立雑誌 社, 賣捌所 警醒社, 發賣所 東京獨立雑誌 販賣部, pp.41-57; エリ オットへの言及はp.56.	『東京獨立雑誌』第22号 (1899.02.15) 掲 載分の収録; 『外国語之研究』は『東京獨 立雑誌』に掲載された, 外国語に関する一 連の研究等を単行本として刊行したもの; 記載は第6版 (明治38年4月15日)に基 づく。ただし第6版の奥付では, 「發行所 東 京獨立雑誌社, 賣捌所 警醒社, 發賣所 東京獨立雑誌販賣部」という記載はなく, 単に「發賣所 警醒社書店」という記載にな っている; 復刻版 (南雲堂, 1984.03.25)あり; 『内村鑑三信仰著作全集 5』(1962.07.12), 『内村鑑三全集 6』(1980.11.25)に収録
1919.07.10	大正 8	内村鑑三 述, 藤井武 筆	神の愛	聖書之研究	第貳百貳拾八號, pp.305 -309; エリオットへの言 及はp.307.	サイラス・マーナーのことを間違っ てダニエル・デロンダとして言及している
1925.10.10	大正 14	内村鑑三	「日々の生涯」の中 の「二十五日 (金) 雨」	聖書之研究	第三百三號, p.48.	1925.09.25の日記; 「まことに今日の日本に 文芸は有っても文学はない。文学は思想であ る。思想なき文学者は文学者にあらずして文 芸師である。講談師と異ならざる者である。彼ら の間にサッカリ, ジッケンス, ジョージ・ エリオットのごとき文学者は一人もない。」; 記載は『聖書之研究』復刻版第二十八卷 (聖 書之研究復刻版刊行会, 1972.02.20)による; 『内村鑑三日記書簡全集 3』(教文館, 1965. 02.03), 『内村鑑三全集 34: 日記 二』(岩 波書店, 1983.07.25)に収録

日本の作家等とジョージ・エリオット（書誌）

1932.05.05	昭和7	内村鑑三	「愛吟」の中の「志望」	内村鑑三全集 第十二巻 日記下	岩波書店, p.820.	『愛吟』（改版, 1915.09.14）を収録；「収録に當り尠しく原形に變更を加えた」もの（「例言」, p.1）；初版（1897.07.25）及び改版の最後に「附録」として収められていた、内村鑑三自身の創作詩「海」はこの全集版には収録されていない
1932.12.15	昭和7	内村鑑三	一九二五年（大正十四年）「九月二十五日（金）雨」	内村鑑三全集 第十八巻 日記下	岩波書店, p.260.	初出は『聖書之研究』第303号（1925.10.10）
1933.05.15	昭和8	内村鑑三	Literature of the Victorian Era	内村鑑三全集 第十六巻 英文（下）	岩波書店, pp.198-203; エリオットへの言及は pp.200-01.	初出は『万朝報』第1379号, 第1380号, 第1381号（1897.06. 27, 29, 30）
1933.05.15	昭和8	内村鑑三	「外国語の研究」の中の「第四章 英語の美」	内村鑑三全集 第十六巻 英文（下）	岩波書店, pp.661-66；エリオットへの言及はp.666.	初出は『東京獨立雜誌』第22号（1899.02.15）の「英語の美」
1933.12.15	昭和8	内村鑑三	大正九年（一九二〇年）Christmas eve「12月24日」	内村鑑三全集 第二十巻 書翰	岩波書店, pp.984-85; エリオットへの言及は p.984.	
1952.01.10	昭和27	内村鑑三（訳）	志望〈A WISH〉	歓喜と希望・愛吟	角川文庫, 角川書店, p.92.	初出は『愛吟』（1897.07.25）
1961.07.12	昭和36	内村鑑三	神の愛	内村鑑三聖書注解全集 第十四巻	教文館, pp.231-35; エリオットへの言及はp.234.	初出は『聖書之研究』第228号（1919.07.10）；サイラス・マーナーのことを間違っでダニエル・デロンダとして言及している
1962.07.12	昭和37	内村鑑三	「愛吟」の中の「志望」	内村鑑三信仰著全集 5	教文館, p.171-72.	『愛吟』（1897.07.25）の項を参照；「なお原著では訳詩と原詩とをそれぞれ別にまとめているが、本全集では編集上両者をあわせて編集した」（「解説」p. 247）；「解説」（山本泰次郎）によれば、『愛吟』の書は『『キリスト信徒のなぐさめ』についてひろく読まれ、著者の生前に二十五版を重ねたが、死後も文庫版その他に収められて大いに行なわれている。おそらく今後も、著者の代表作の一つとして永く、広く読まれるであろう』（p. 247）
1962.07.12	昭和37	内村鑑三	「外国語の研究」の中の「第四章 英語の美」	内村鑑三信仰著作全集 5	教文館, pp.196-203; エリオットへの言及はp.203.	初出は『東京獨立雜誌』第22号（1899.02.15）の「英語の美」
1965.01.16	昭和40	内村鑑三	「第1170信（和文葉書）」（Christmas eve. 1920）	内村鑑三日記書簡全集 7	教文館, pp.265-66; エリオットへの言及はp.265およびp.266の「注3」	ワーズワースの詩の一節の引用と「George Eliotの愛誦せし句」というコメント
1965.02.03	昭和40	内村鑑三	1925年（大正14年）「九月二十五日（金）雨」	内村鑑三日記書簡全集 3	教文館, p.220；再版（昭和51年4月30日）	初出は『聖書之研究』第303号（1925.10.10）
1980.11.25	昭和55	内村鑑三	「外国語の研究」の中の「英語の美」	内村鑑三全集 6	岩波書店, pp.335-342.	初出は『東京獨立雜誌』第22号（1899.02.15）の「英語の美」
1981.06.24	昭和56	内村鑑三	「愛吟」の中の「志望」	内村鑑三全集 4	岩波書店, pp.354, 381.	『愛吟』初版（1897.07.25）を収録；「解題」（亀井俊介）によれば、「希有な思想詩集」（p.450）
1981.06.24	昭和56	内村鑑三	Literature of the Victorian Era	内村鑑三全集 4	岩波書店, pp.412-416; エリオットへの言及はp.414.	初出は『万朝報』第1379号, 第1380号, 第1381号（1897.06. 27, 29, 30）
1982.09.24	昭和57	内村鑑三	神の愛	内村鑑三全集 25	岩波書店, pp.52-57；エリオットへの言及は p.54.	初出は『聖書之研究』第228号（1919.07.10）；サイラス・マーナーのことを間違っでダニエル・デロンダとして言及している
1983.07.25	昭和58	内村鑑三	1925（大正14）年「九月二十五日（金）雨」	内村鑑三全集34：日記 二	岩波書店, pp.486-87.	初出は『聖書之研究』第303号（1925.10.10）
1983.11.24	昭和58	内村鑑三	1920（大正9）年「12月24日」	内村鑑三全集38：書簡 三	岩波書店, pp.464-65; エリオットへの言及はp.465.	
1984.03.25	昭和59	内村鑑三	英語の美	外国語之研究（復刻版）	南雲堂, pp.41-57；エリオットへの言及はp.56.	初版（東京獨立雜誌社, 1899.05.07）の復刻版；初出は『東京獨立雜誌』第22号（1899.02.15）の「英語の美」
1988.03.10	昭和63	内村鑑三	第四章 英語の美	外国語の研究	講談社, 講談社学術文庫, pp.76-88; エリオットへの言及はp.87.	初出は『東京獨立雜誌』第22号（1899.02.15）の「英語の美」
森 鷗外（1862-1922）						
1891.05.25	明治24	（森鷗外）	鷗外文話（其一至其十一）	志がらみ草紙	第二十號, pp.28-45.	「其三、今の英吉利文學」（pp.32-34）の中でエリオットに言及（p.33）

1893.02.25	明 治 26		鷗外文話（其十二至其十九）		第四十一號, pp.32-44.	
1893.03.25			鷗外文話（其二十至其二十三）		第四十二號, pp.35-48.	
1891.09.25	明 治 24	(森鷗外)	山房論文（其一，其二，其三，其四，其五）	志がらみ草紙	第廿四號, pp.1-28.	「其一 逍遙子の新作十二番中既發四番合評，梅花詞集拍及梓神子（讀賣新聞）」(pp.1-16) の中でエリオットに言及 (pp.8, 9)
1891.10.25			山房論文（其六），山房論文其六附録		第廿五號, pp.1-26.	
1891.12.25			山房論文（其七），山房論文其七附録		第廿七號, pp. 1-10.	
1892.01.25	明 治 25		山房論文（其八），同附録，山房論文（其九），同附録		第廿八號, pp. 1-30.	
1892.02.25			山房論文（其十），同附録		第廿九號, pp. 3-25.	
1892.03.25			山房論文（其十一），山房論文（其十二）		第三十號, pp. 1-35.	
1892.06.25			山房論文（其十三）		第三十三號, pp.1-26.	
1896.01.31	明 治 29	歸休庵（森鷗外）	鷗翻搔	めさまし草	まきの一, pp.12-20.	
1896.02.25			鷗翻搔		まきの二, pp.13-50.	「女詩人に告ぐ」(pp.46-47) の項にエリオットへの言及あり（カーライル夫人からの書簡の抄訳を含む）
1896.03.25			鷗翻搔		まきの三, pp.9-19.	
1896.04.25			鷗翻搔		まきの四, pp.7-35.	
1896.05.25			鷗翻搔		まきの五, pp.23-48.	
1896.06.30			鷗翻搔		まきの六, pp.8-27.	
1895.05.28	明 治 30	森林太郎	今の英吉利文學	かげ草	春陽堂, pp.632-35；エリオットへの言及はp.634.	初出は『志がらみ草紙』第二十號(1891.05.25)
1898.02.28	明 治 31	(森鷗外 訳)	審美新説	めさまし草	まきの二十六, pp.27-32.	「審美新説」は、ヨハネス・フォルケルト (Johannes Volkelt) の「審美上時事問題 Aesthetische Zeitfragen」の大意を約取したるもの（「審美新説」、『めさまし草』まきの三十九 [1899.09.16], p.11）；明治三十三年二月二十三日，春陽堂から単行本『審美新説』として刊行
1898.05.20			審美新説		まきの二十八, pp.41-48.	エリオットの <i>Adam Bede</i> への言及 (p.48)
1898.07.08			審美新説		まきの二十九, pp.9-15.	
1898.08.19			審美新説		まきの三十, pp.14-16.	
1898.10.31			審美新説		まきの三十二, pp.1-10.	
1898.11.30			審美新説		まきの三十三, pp.1-10.	
1899.02.18	明 治 32		審美新説		まきの三十五, pp.1-18.	
1899.05.31			審美新説		まきの三十七, pp.1-8.	
1899.07.31			審美新説		まきの三十八, pp.1-10.	
1899.09.16			審美新説		まきの三十九, pp.1-12.	
1900.02.23	明 治 33	森林太郎（編）		審美新説	春陽堂, 49pp.+「審美綱領正誤」；エリオットへの言及はp.8.	初出は『めさまし草』まきの二十六 (1898.02.28)；「審美新説は近ごろ Johannes Volkelt が著す所の審美上時事問題 Aesthetische Zeitfragen の梗概を述ぶるものなり」（「凡例」）；本文では「森林太郎編」，奥付では「著者 森林太郎」
1923.02.25	大 正 12	森林太郎（訳）	審美新説	鷗外全集 第一巻	鷗外全集刊行會, pp. 15-235；エリオットへの言及はp. 170.	初出は『めさまし草』まきの二十六 (1898.02.28)；「審美新説は近ごろ Johannes Volkelt が著す所の審美上時事問題 Aesthetische Zeitfragen の梗概を述ぶるものなり」（「凡例」 [p.155]）
1923.02.25	大 正 12	森林太郎	「柵草紙の山房論文」の中の「逍遙子の諸評語 小説三派（子羊漫言七一面より）及梓神子（春酒舎漫筆一五一面より）」	鷗外全集 第一巻	鷗外全集刊行會, pp.374-89；エリオットへの言及はpp.381, 382	初出は『志がらみ草紙』第廿四號 (1891.09.25)
1925.05.31	大 正 14	森林太郎	「今の英吉利文學」	鷗外全集 第三巻	鷗外全集刊行會, pp. 628-30；エリオットへの言及はp. 629.	初出は『志がらみ草紙』第二十號 (1891.05.25)

日本の作家等とジョージ・エリオット（書誌）

1971.10.30	昭和46	(森 鷗外)	逍遙子の新作十二番中既發四番合評, 梅花詞集拍及梓神子(讀賣新聞)	吉田精一, 浅井 清編『近代文学評論大系 第1巻 明治期 I』	角川書店, pp.177-88; エリオットへの言及はpp.182, 183.	
1973.07.23	昭和48	森林太郎 (訳)	「審美新説」	鷗外全集 第二十一巻	岩波書店, pp. 67-142; エリオットへの言及はp. 83.	初出は『めざまし草』まきの二十六 (1898.02.28);「審美新説は近ごろJohannes Volkeltが著す所の審美上時事問題Aesthetische Zeitfragenの梗概を述ぶるものなり」(「凡例」[p.69])
1973.08.22	昭和48	森林太郎	「觀潮樓偶記 その一」の中の「今の英吉利文學」	鷗外全集 第二十二巻	岩波書店, pp.482-84; エリオットへの言及はpp. 483.	初出は『志がらみ草紙』第二十號 (1891.05.25)
1973.09.22	昭和48	森林太郎	「柵草紙の山房論文」の中の「逍遙子の諸評語 小説三派 (子羊漫言七一面より) 及梓神子 (春逝舎漫筆一五一面より)」	鷗外全集 第二十三巻	岩波書店, pp.3-16; エリオットへの言及はpp. 9, 10.	初出は『志がらみ草紙』第廿四號 (1891.09.25)
若松賤子 (1864-1896)						
1886.10.25	明治19	若松しづ ^[ママ]	いへのとも 答の部	女學雜誌	第三拾九號, p.168. (叢話)	「妾か讀み見て宜しき者と考へ候西洋の小説」としてFelix Holt, Scenes of Clerical Life, Silas Marner, Adam Bedeが挙げられている; Elliottという誤記
1890.04.05	明治23	若松しづ子	閨秀小説家答	女學雜誌	第二百七號, pp.187-90. (雑録)	若松しづ子が讀んだ小説家の一人としてエリオットが挙げられている (p.189)
1990.08.15	平成2	師岡愛子	若松賤子と英詩	石井正之助編『饗宴一英学随想・評論集一』	石井正之助発行, pp. 237-40; エリオットへの言及はp. 238.	賤子の愛読した作家の一人としてエリオットが挙げられている
夏目漱石 (1864-1909)						
1892.12.05	明治25	オーガスタス・ウッド (夏目漱石 訳)	詩伯「テニソン」	哲學雜誌	第七冊第七十號, pp. 516-22. (史傳)	夏目漱石の翻訳であると推定されている (『漱石全集 第十二巻 初期の文章及詩歌俳句』(特装版) (岩波書店, 1967)の「解説」[p.840]を参照)
1893.01.10	明治26	オーガスタス・ウッド ^[ママ]	詩伯「テニソン」(承前)		第八卷 ^[ママ] 第七十一號, pp.584-88. (史傳)	内題(本文中のタイトル)は「詩伯テニソン(承前)」
1893.03.10		オーガスタス・ウッド ^[ママ]	詩伯テニソン ^[ママ] (完結)		第八卷 ^[ママ] 第七十三號, pp.749-57. (史傳)	エリオットへの言及はp.756; 内題(本文中のタイトル)は「詩伯「テニソン」(承前)」
1896.10.24	明治29	夏目金之助	人生	龍南會雜誌	第五高等學校龍南會, 第四拾九號, pp.1-5. (論説)	エリオットへの言及はp.2.
1905.01.15	明治38	夏目金之助	カーライル博物館	學燈	第九年第一號, pp.1-8.	エリオットへの言及はp.2.
1906.10.01	明治39	夏目漱石	女子と文學者	女子時事新聞	第貳卷第貳號一號, p.1. (言論)	「ジュリエット」と表記されている
1906.10.15	明治39	夏目漱石	人工的感興	新潮	第五卷第四號, pp.1-3.	エリオットへの言及はp.1.
1907.05.07	明治40	夏目金之助		文學論	大倉書房, pp.268-69, 408-09, 647.	「EliotがTinaを寫すに用ゐたる對置に至っては天下の名文なり。」(p.408); 記載は復刻版(名著復刻全集編集委員会編『文學論』[日本近代文学館, 1975.11.15])に基づく
1908.10.01	明治41	夏目漱石	無教育な文士と教養ある文士	英語青年	第貳拾卷第一號, p.22.	「之に對して同じく女作家George Eliotを見ると彼は始め小説家になろうと思ふへは少しもなく, 専ら哲學の研究に耽つたが中年にして小説に筆を染め終にあんな大作家になつた……」
1909.02.01	明治42	夏目漱石	作家としての女子	女子文壇	第五年第二號, pp.8-9.	エリオットへの言及はp.8.
1909.03.16	明治42	夏目金之助		文學評論	春陽堂, p.310.	「第四編 スキフトと厭世文學」の中でエリオットに言及; 記載は復刻版(名著復刻全集編集委員会編『文學評論』[日本近代文学館, 1975.11.15])に基づく
1909.05.21	明治42	夏目漱石	メレディスの訃 (一)	国民新聞	第六千七百七十六號, p. 1. (國民文學)	エリオットへの言及は「メレディスの訃(一)」にあり
1909.05.22			メレディスの訃 (二)		第六千七百七十七號, p. 1. (國民文學)	

大 嶋 浩

1917.01.02	大正6	松浦 一	「夏目漱石氏の一生」の中の「大學教授時代」	『新小説』臨時号「文豪夏目漱石」	春陽堂, pp.38-42; エリオットへの言及はp.39.	のちに『漱石全集月報』第八号(1928.10.)に本編の前半部分を収録, そのときに『文学論』の頃」というタイトルが付けられた: 「其外先生は図書館あたりに澤沢あつた書物の便利の為でもあつたらうが, サイラス・マーナーを我々に讀まして居られた」(p.39)
1928.10.	昭和3	松浦 一	「文学論」の頃	漱石全集月報(昭和三年版)	第八號, 岩波書店内漱石全集刊行会, pp.7-8; エリオットへの言及はp.8.	初出は『新小説』(春陽堂)臨時号「文豪夏目漱石」(1917.01.02)
1928.11.	昭和3	野間眞綱	文学論前後	漱石全集月報(昭和三年版)	第九號, 岩波書店, pp.2-3; エリオットへの言及はp.2.	「先生の受持は一つはサイラスマーナーの講讀と今一つは文学論形式篇の講義とであった」(p.2)
1932.12.20	昭和7	吉村冬彦(寺田寅彦)	夏目漱石先生の追憶	俳句講座 第八巻 現代結社篇	改造社, pp.321-32; エリオットへの言及はp.323.	熊本第五高等学校では「オビアムイーターや, サイラス・マーナーを教はった」(p.323)
1940.12.20	昭和8	吉村冬彦(寺田寅彦)	夏目漱石先生の追憶	蒸發皿	岩波書店, pp.343-61; エリオットへの言及はp.347.	初出は『俳句講座 第八巻 現代結社篇』(改造社, 1932.12.20); 表紙の著者名は「吉村冬彦」, 奥付での著者名は「寺田寅彦」
1948.11.15	昭和23	金子健二		人間漱石	いちろ社, 269pp.; エリオットへの言及はpp.6, 28, 53-61, 69, 70, 72, 186, 256-69.	『ロモラ』を高く評価(p. 256)
1956.04.30	昭和31	金子健二		人間漱石	協同出版, 298pp.; エリオットへの言及はpp.6, 28, 53-61, 69, 70, 72, 186, 256-69.	「昭和23年にもした「人間漱石」の舊稿に若干の修正を施すとともに, 新稿十篇を加えて出来上がっているもの」(p.5); 記載は新装版(1965.06.15)に基づく
1965.04.	昭和40	野上彌生子	はじめてオースティンを読んだ話	世界の文学 第6巻 オースティン 附録27(月報)	中央公論社, pp.1-2; エリオットへの言及はp.1.	「夏目先生が貸してくださったのはジェーン・オースティンの"Pride and Prejudice"(自重と偏見)にシャロット・ブロンテの"Jane Eyre"(ジェーン・エア), それにジョージ・エリオットのものが一冊, その他はエドモンド・ゴスの著であったかと記憶するが絵入りの英文学史であった。」(p.1); 『隨筆 一隅の記』(新潮社, 1968.08.30)に収録
1965.12.09	昭和40	夏目漱石	カーライル博物館	漱石全集 第二巻 短篇小説集(特装版)	岩波書店, pp.31-43; エリオットへの言及はp.34.	
1966.08.23	昭和41	夏目漱石		漱石全集 第九巻 文学論(特装版)	岩波書店, pp.226, 331-32, 502, 654.	
1966.09.24	昭和41	夏目漱石		漱石全集 第十巻 文学評論(特装版)	岩波書店, pp.237, 238.	
1966.11.24	昭和41	夏目漱石	日記(明治三十四年八月三日 土)	漱石全集 第十三巻 日記及断片(特装版)	岩波書店, p.76.	
1966.12.24	昭和41	夏目漱石	書簡一七一(明治三十四年九月十二日 木)	漱石全集 第十四巻 書簡集(特装版)	岩波書店, pp.187-89; エリオットへの言及はp.188.	
1967.03.30	昭和42	夏目漱石	人生	漱石全集 第十二巻 初期の文章及詩歌 俳句(特装版)	岩波書店, pp.265-70; エリオットへの言及はp.266.	
1967.03.30	昭和42	オウガスタス, ウード(夏目漱石)	詩伯「テニソン」	漱石全集 第十二巻 初期の文章及詩歌 俳句(特装版)	岩波書店, pp. 317-33; エリオットへの言及はp.332.	
1967.04.28	昭和42	夏目漱石	「蔵書の餘白に記入されたる短評並に雑感」の中の「Jane Austen」の項の中の「Sense and Sensibility」	漱石全集 第十六巻 別冊(特装版)	岩波書店, pp. 68-69; エリオットへの言及はp.68.	
1967.04.28	昭和42	夏目漱石	「蔵書の餘白に記入されたる短評並に雑感」の中の「Rhoda Fleming」	漱石全集 第十六巻 別冊(特装版)	岩波書店, pp.89-91; エリオットへの言及はp.89.	
1967.04.28	昭和42	夏目漱石	「蔵書の餘白に記入されたる短評並に雑感」の中の「Salambo」	漱石全集 第十六巻 別冊(特装版)	岩波書店, pp.126-27; エリオットへの言及はpp.127, 864n一二七・3.	
1967.04.28	昭和42	夏目漱石	女子と文学	漱石全集 第十六巻 別冊(特装版)	岩波書店, pp.524-25; エリオットへの言及はp.525.	

日本の作家等とジョージ・エリオット（書誌）

1967.04.28	昭和42	夏目漱石	人工的感興	漱石全集 第十六巻別冊（特装版）	岩波書店, pp.526-30 ; エリオットへの言及はp.526.	
1967.04.28	昭和42	夏目漱石	無教育な文士と教育ある文士	漱石全集 第十六巻別冊（特装版）	岩波書店, pp.618-19 ; エリオットへの言及はp.618.	
1967.04.28	昭和42	夏目漱石	作家としての女子	漱石全集 第十六巻別冊（特装版）	岩波書店, pp.658-59 ; エリオットへの言及はp.659.	
1967.04.28	昭和42	夏目漱石	メレデイスの訃	漱石全集 第十六巻別冊（特装版）	岩波書店, pp.664-68 ; エリオットへの言及はp.665.	
1967.04.28	昭和42	夏目漱石	「漱石山房蔵書目録」の中の「Eliot (G.).」	漱石全集 第十六巻別冊（特装版）	岩波書店, pp.15-16 [pp.817-18].	
1975.11.15	昭和50			名著復刻全集編集委員会編『名著復刻漱石文学館 解説』	日本近代文学館, p.169.	
1976.05.31	昭和51	夏目漱石		村岡勇編『漱石資料—文学論ノート』	岩波書店, pp.289, 340.	
1984.06.20	昭和59	荒正人著, 小田切秀雄監修		増補改訂 漱石研究年表	集英社, pp. 301, 331-335.	1901年の「チェルシー」のジョージ・エリオットの旧居を訪れたこと, 及び東京帝国大学文科大学での『サイラス・マーナー』の講義に言及
1985.10.06	昭和60	夏目漱石		文学評論（下）	岩波書店, 岩波文庫, pp.23-24.	
1990.04.16	平成2	夏目漱石	ロンドン留学日記（明治三十四年八月三日（土））	平岡敏夫編『漱石日記』	岩波書店, 岩波文庫, pp.71-72, 243n七二2.	
1994.01.10	平成6	夏目金之助	カーライル博物館	漱石全集 第二巻 倫敦塔ほか・坊ちゃん	岩波書店, pp.31-44 ; エリオットへの言及はpp.34, 416n 三四・13.	
1995.02.22	平成7	オウガスタス, ウード（夏目金之助訳）	詩伯「テニソン」	漱石全集 第十三巻 英文学研究	岩波書店, pp.135-52; エリオットへの言及はpp.151, 651n一五一・6 ; 他にp.685でもエリオットに言及	
1995.04.19	平成7	夏目金之助	人生	漱石全集 第十六巻 評論ほか	岩波書店, pp.10-15 ; エリオットへの言及はpp.11, 655n一・7.	
1995.06.09	平成7	夏目金之助		漱石全集 第十五巻 文学評論	岩波書店, p.246.	
1995.08.08	平成7	夏目金之助		漱石全集 第十四巻 文学論	岩波書店, pp.231, 339-40, 517, 696n五一七・9.	
1995.11.18	平成7	夏目金之助	日記（明治三十四年八月三日（土））	漱石全集 第十九巻 日記・断片 上	岩波書店, pp.95, 450n九十五・4.	
1996.02.06	平成8	寺田寅彦	夏目漱石先生の追憶	漱石全集 別巻 漱石言行録	岩波書店, pp.66-78; エリオットへの言及はp.69.	初出は『俳句講座 第八巻 現代結社篇』（改造社, 1932.12.20）, 初出の署名は「吉村冬彦」; 『サイラス・マーナー』に言及
1996.02.06	平成8	野間真綱	文学論前後	漱石全集 別巻 漱石言行録	岩波書店, pp.162-64; エリオットへの言及はp.162.	初出は『漱石全集月報』（昭和三年版）第九号（岩波書店, 昭和三[1928]年十一月五日発行）
1996.02.06	平成8	松浦 一	「文学論」の頃	漱石全集 別巻 漱石言行録	岩波書店, pp.165-69; エリオットへの言及はp.166.	初出は雑誌『新小説』（春陽堂）臨時号「文豪夏目漱石」（大正六[1917]年一月二日発行）
1996.03.19	平成8	夏目金之助	書簡232（明治三十四年九月十二日[木]）	漱石全集 第二十二巻 書簡 上（明治22年-明治39年）	岩波書店, pp.237-39 ; エリオットへの言及はpp.237, 683-84n二三七・13.	
1996.05.15	平成8	夏目金之助	女子と文学者	漱石全集 第二十五巻別冊 上	岩波書店, pp.188-89 ; エリオットへの言及はpp.189, 523n一八九・5, 523n一八九・8.	
1996.05.15	平成8	夏目金之助	人工的感興	漱石全集 第二十五巻別冊 上	岩波書店, pp.190-94 ; エリオットへの言及はp.190.	
1996.05.15	平成8	夏目金之助	作家としての女子	漱石全集 第二十五巻別冊 上	岩波書店, pp.346-47 ; エリオットへの言及はp.347.	

1996.05.15	平成8	夏目金之助	メレディスの訃	漱石全集 第二十五卷別冊 上	岩波書店, pp.352-57; エリオットへの言及は p.353.	
1996.12.05	平成8	寺田寅彦	夏目漱石先生の追憶	寺田寅彦全集第一巻	岩波書店, pp.310-24; エリオットへの言及は p.313.	初出は『俳句講座 第八巻 現代結社篇』(改造社, 1932.12.20), 初出の署名は「吉村冬彦」; 『サイラス・マーナー』に言及
1997.06.27	平成9	夏目金之助		漱石全集 第21巻 ノート	岩波書店, pp.273, 367, 464, 602, 607, 638, 640.	
1997.12.19	平成9	夏目金之助	「蔵書に書き込まれた短評・雑感」の中の「65 Austen(J.): Sense and Sensibility」, 「873 Flaubert(G.): Salambo」, 「494 Meredith(G.): Rhoda Fleming」	漱石全集 第二十七巻 別冊 下	岩波書店, pp.31-32, 117-18, 223-24; エリオットへの言及は pp.31, 118, 224.	
1997.12.19	平成9	夏目金之助	「漱石山房蔵書目録」の中の「226-234」	漱石全集 第二十七巻 別冊 下	岩波書店, 漱石山房蔵書目録 p.32.	
2002.03.30	平成14	(金子健二)		金子三郎編『記録 東京帝大一年生の聴講ノート』	リープ企画株式会社, pp.374, 414, 474.	
2007.02.16	平成19	夏目漱石		文学論(上)	岩波書店, 岩波文庫, pp.302, 396n三〇二9.	
2007.04.17	平成19	夏目漱石		文学論(下)	岩波書店, 岩波文庫, pp.118-20, 346, 379n一一九12.	
宮崎湖処子 (1864-1922)						
1895.10.10	明治28	讚美生	巾幗文豪	家庭雑誌	第六拾参號, pp.3-8. (史談)	讚美生とは宮崎湖処子のこと; エリオットへの言及(エリオットのオースティン賛美の評言)はp.7.
1897.09.10	明治30	八面樓主人	鑑三内村氏の『愛吟』	國民之友	第参百六拾壹號, p.121-22. (批評)	八面樓主人とは宮崎湖処子のこと; エリオットへの言及はp.121.
1905.10.15	明治38	宮崎湖處子	女作家オーステン嬢	婦人畫報	臨時増刊貴婦人, 第一巻第五號, 近事畫報社, pp.5-12; エリオットへの言及はp.10.	「ゼラジ, エリオットは, オーステン女史は『最も完き名人を意味して謂ふ, 技術家の中, 最も大いなる技術家である』と称揚して居る。」(p.10)
1906.02.10	明治39	宮崎湖處子	女作家オーステン嬢	湖處子文集	鹿鳴社, pp.117-33; エリオットへの言及はpp.128-29.	初出は『婦人畫報』臨時増刊貴婦人, 第一巻第五號(1905.10.15)
津田梅子 (1864-1929)						
2005.03.10	平成17	亀田帛子		津田梅子: ひとりの名教師の軌跡	双文社出版, p.245.	津田梅子の最後となった卒業生への告辞(1917.07.10)の中で, 梅子はエリオットの詩("O May I Join...")の一節を引用

注

1 調査の成果の一部は, すでに公表されている。以下を参照。拙論, 「日本におけるジョージ・エリオット文献書誌: 明治・大正期(翻訳・書物編)」, 『兵庫教育大学研究紀要』第28巻(兵庫教育大学, 2006年3月); 拙論, 「日本におけるジョージ・エリオット文献書誌: 明治・大正期(新聞・雑誌編)」, 『兵庫教育大学研究紀要』第29巻(兵庫教育大学, 2006年9月);

拙論, 「日本におけるジョージ・エリオット文献書誌: 明治・大正期(新聞・雑誌編[続])」, 『兵庫教育大学研究紀要』第30巻(兵庫教育大学, 2007年2月)。

なお, 本稿の書誌に関する主要参考文献については, 上記の書誌の参考文献を参照。

2 拙論, 「日本におけるジョージ・エリオット文献書誌: 明治・大正期(翻訳・書物編)」, 『兵庫教育大学研究紀要』第28巻(兵庫教育大学, 2006年3月): 74.